

◆内裏南辺地区の調査

—第83-7次・第83-12次

1 はじめに

内裏南辺地区にあたる醍醐池南岸で、現状変更に伴う事前調査を2件実施した。第83-7次調査は擁壁改修に、第83-12次調査は西端の取水口改修に伴うものである。第83-7次調査地は内裏内郭の南辺に位置し南を限る施設や第18・20次調査（『概報』6・8）で検出した先行朱雀大路SF1920、南北大溝SD1901Aの存在が予想された。内裏外郭施設は、第2・4・11・22・55・58・61・70次調査（『報告』Ⅰ・Ⅲ、『概報』5・9・18・20・21・23）や、奈良県教育委員会の調査（『藤原宮』奈良県 1969年）によって、北面が掘立柱単廊、東・西・南面が掘立柱塀で、南の塀は朝堂院北回廊の両翼に取り付くことが分かっている。規模は、東西303m、南北378m、柱間は約3m等間である。外郭内は、南半分で調査が進んでいるが、確認された建物は少ない。東側には、桁行8間、梁間2間以上の掘立柱南北棟建物SB6052と朝堂院北回廊に接して桁行6間以上、梁間4間の礎石建東西棟SB530がある。西側には、桁行7間、梁間2間の掘立柱南北棟建物SB1751があるのみ。内郭では、掘立柱建物SB2230→東西塀SA2231→東西塀SA2232の2回の建て替えが確認された。また奈良県の調査では外郭の北単廊から約18.5m南で、柱間約3mの東西塀SA125を確認している（図14参照）。内裏は、その中心に醍醐池が位置するが、今回の発掘により、池岸においては、遺構が比較的良く残っている状況が確認できた。

2 基本層序

第83-7次調査地の基本的な土層は、茶褐色粗砂（池の堆積土）・茶灰褐色土、その下に、西側では茶褐色砂質土・灰褐色粘質土・黄褐色微砂、東側では暗灰褐色粘質

土・暗黄褐色土が堆積する。地表面下0.2～0.3mの茶褐色砂質土または暗灰褐色粘質土の上面で遺構を検出した。第83-12次調査地は、深さ1m以上にも及ぶ池の堆積土で被われ、池底は確認していない。北トレンチの西端部にわずかに旧池岸が残るが、その部分では厚さ0.2m程の遺物含包層（暗灰褐色粘質土）の下に黄褐色粘土の遺構面（標高68m）を確認した。

3 検出遺構

検出した遺構は、古墳時代、藤原宮直前期、藤原宮期、藤原宮期以降の4時期に大別できる（図15・17）。

古墳時代の遺構

溝4条、土坑1基がある。SD8862は調査区西端にある。幅約1.5m以上、深さ約0.4m以上の南から北に流れる自然流路である。調査区の東側でも、自然流路3条を検出した。いずれも地形に沿い南東から北西に流れる。SD8863、SD8864、SD8865の順に新しい。SD8863は幅2m以上、深さ0.2m、SD8864は幅0.6m以上、深さ0.3m、SD8865は幅1m前後、深さ0.3mである。SK8867はSD8863の西北にあり、長辺が0.8mほどの不整形の土坑である。埋土から少量の須恵器片が出土した。

藤原宮直前期の遺構

先行朱雀大路SF1920の東側溝SD1921と南北大溝SD1901Aがある。SD1921は幅1m、深さ0.6mで、南北約3m分検出。それより北は削平されて残っていない。上層に灰褐色微砂、下層に茶灰色粗砂が堆積する。

SD1901Aは、藤原宮・京の造営に関わる資材運搬のための運河遺構と考えられる。今回は、南北約10mを検出し、約2m分について溝底まで掘り下げた。幅5m、深さ1.6mある。従来同様、護岸施設はない。溝内の土層は4層に大別できる。下層は厚さ0.4mほどで粗砂が堆積

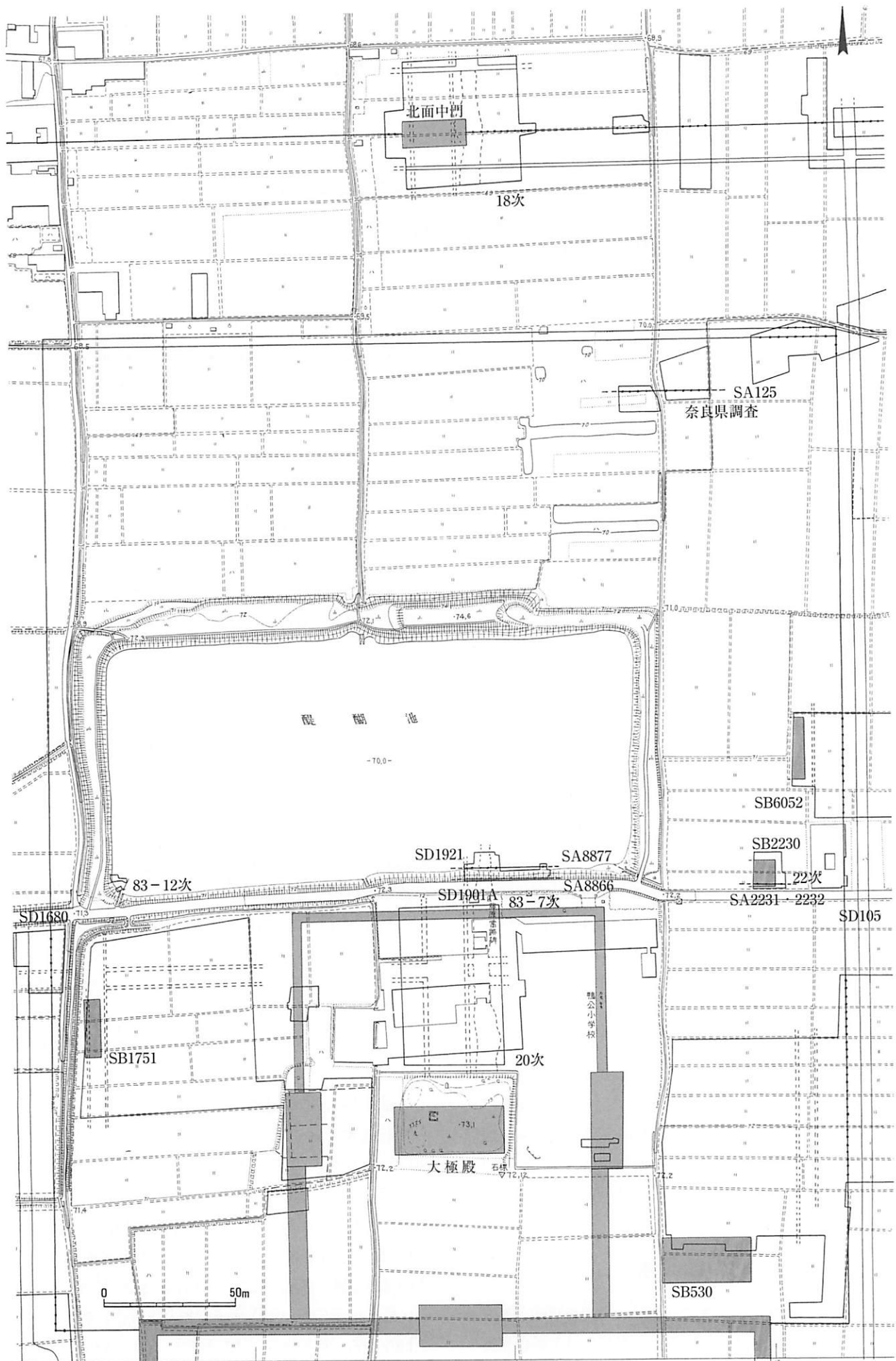


図14 内裏地区の遺構図および調査位置図 1 : 2000

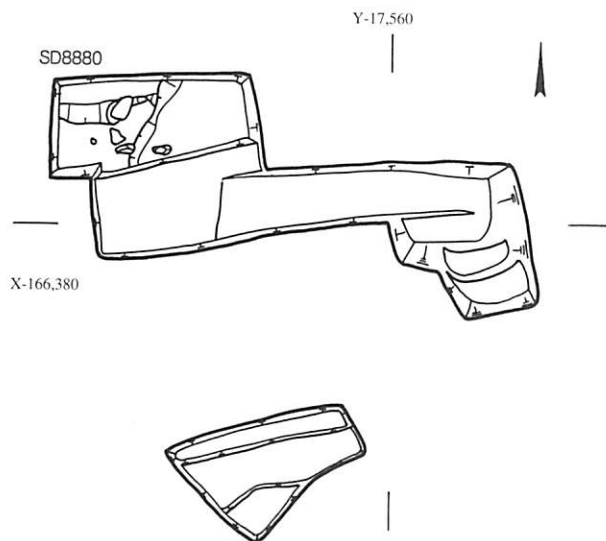


図15 第83-12次調査遺構図 1:100

し、かなりの水量があったことを示す。中層は厚さ0.6mほどで、粘土や粗砂が互層に堆積する。中層の上面には多量の木片や木屑を含む。上層（厚さ0.4m）と最上層（黄褐色粘土、厚さ0.2m）は、藤原宮の造営時に、一気に埋め立てた整地土と考えられる。上層と最上層の間には、多量の丸・平瓦を敷き詰めるように投棄している。最上層は堅くしまっており、池の水に洗われることなく、この部分だけが島状に盛り上がり残っていた。これらの仕事はSD1901A埋め立て時に不同沈下を防ぐ目的で行われたと考える。今回確認したSD1901Aは、上流の南側延長部分（幅6～7m、深さ約2m）や下流の北側延長部分（幅7m、深さ1.4m以上）より、規模が一回り小さい（図18）。

藤原宮期の遺構

東西堀2条がある。2条とも、SD1921やSD1901Aを埋め立てた後に作られている。掘立柱東西堀SA8877は、調査区西側で4間分、さらに東端でも柱穴1個を検出した。柱間は約3m等間である。柱穴は1辺1～1.2mの方形で検出面からの深さは、0.5mほどである。仮に、SD1901Aの上を覆う整地土の上面が藤原宮期の地表面に近いとすると、深さは、1～1.2mほどになる。柱抜取穴の埋土にのみ



図16 南北堀SA8877と下層の溝SD1901A・SD1921 西から

丸・平瓦が含まれる。SA8877を東へ延長すると22次調査で検出したSB2230の身舎の北側柱列に揃うので、ここまでは延びないようである。掘立柱東西堀SA8866は、SA8877の南4.2mに位置する。柱間は約3m等間で柱筋がSA8877と揃う。9間分検出。柱穴は1辺0.5mの方形で、検出面からの深さは、0.2～0.3m程である。本来の深さは、0.5m以上はあったのだろう。SA8866を東へ延長すると22次調査区にかかるが、ここでは検出されていない。2条の東西堀が同時併存するのか、前後関係があるのか明らかにできなかった。

第83-12調査地では、北端で東西方向の石組溝SD8880を検出したのみである。

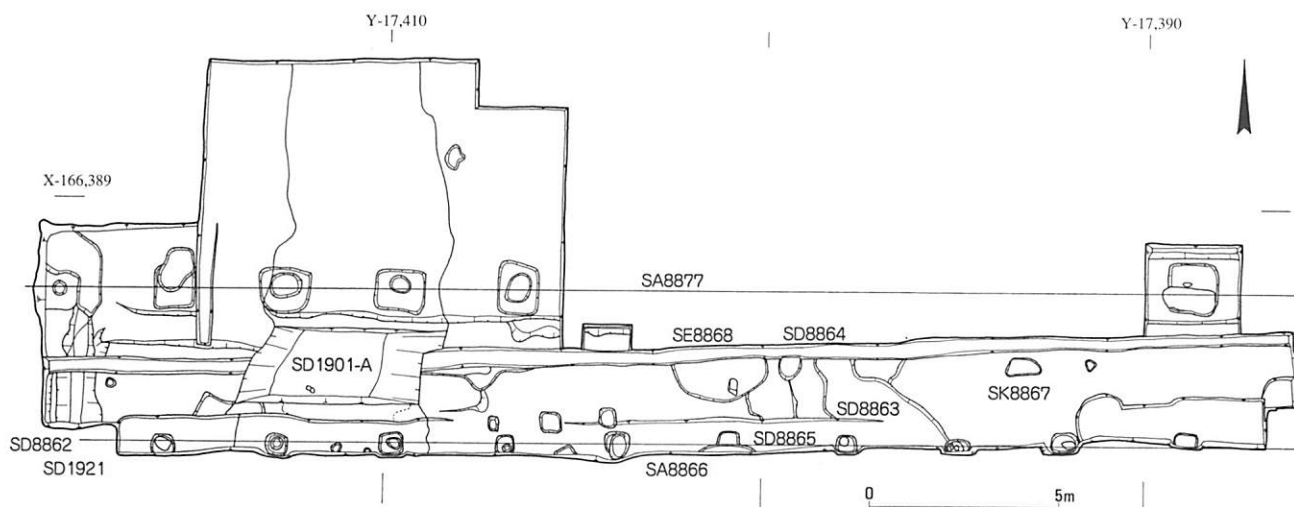


図17 第83-7次調査遺構図 1:200

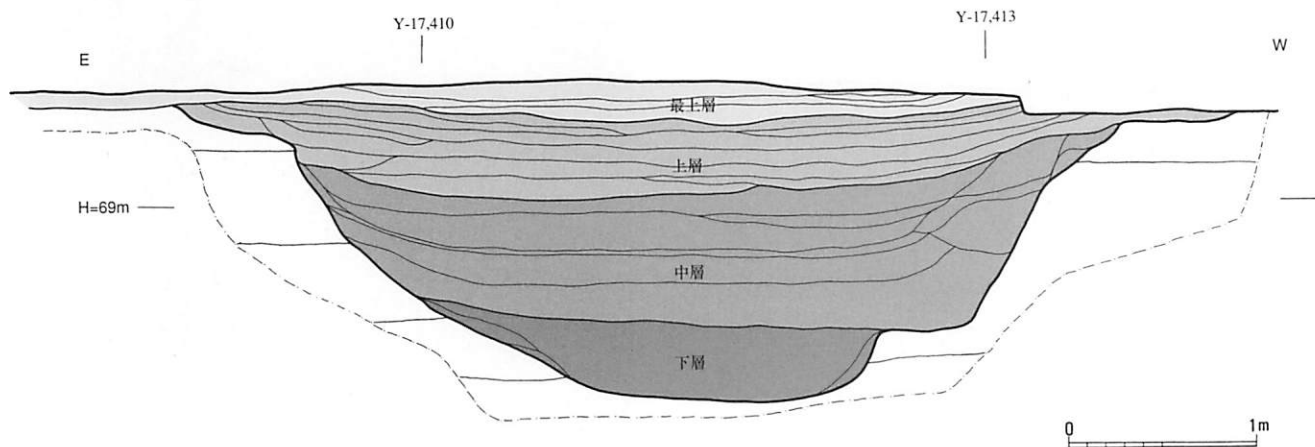


図18 運河SD1901A南壁土層断面図 1:40

藤原宮期以降の遺構

調査区中央北辺に素掘井戸SE8868がある。円形で、直径2m、深さは0.7mである。南半のみ検出。出土遺物が少ないので時期ははっきりしないが、池の堆積土直下で検出した。醍醐池築造前に作られた野井戸であろう。

4 遺物

遺物には土器、瓦、木製品がある。

瓦塼類 軒瓦、丸・平瓦、切面戸瓦、塼がある。軒丸瓦は、6273B、6273D、6281Aが各1点、軒平瓦は6641Eが4点、6643Cが1点、6646Dが2点、丸瓦は、226点、53kg、平瓦は、333点、72kgが出土した。丸・平瓦の大半は粘土紐巻きつけ作りである。SD1901Aの最上層と上層からは、6273D、6643C、6646D、丸瓦(82点、25kg)、平瓦(94点、33kg)、中・下層からは、軒瓦は出土せず丸瓦(3点、0.5kg)と平瓦(9点、0.4kg)が出土した。この他、醍醐池岸辺で、遺物の採集をしたところ、南岸に濃密な瓦の散布を認めることができ、軒丸瓦6275D1点と6281A2点、軒平瓦6641F3点と6646D1点、丸瓦66点41kg、平瓦97点25kgを採集した。

木製品 SD1901Aの下層から曲物と横櫓が出土した。木筒は、SD1901Aの下層から1点出土した。断片のため積読はできない。

5 まとめ

今回の調査の成果と今後の課題を以下に列記する。

- 1 醍醐池の岸際には、遺構が比較的良く残っていることが確認できた。
- 2 藤原宮期直前の、先行朱雀大路東側溝SD1921と南北大溝SD1901Aを検出した。ともに、藤原宮造営に先立って埋め立てられており、SD1901Aの最上層・上層からは、多量の瓦類が出土した。
- 3 藤原宮期の東西堀2条を確認した。この2条の堀と

大極殿院北回廊や内裏北単廊などとの南北距離は以下のようになる(図18)。

SA8877とSA8866	4.2m
SA8877と大極殿院北回廊(心心)	18m
SA8877とSA125	約179m
SA125と内裏北単廊(心心)	約18.5m

ここで、特に注目されるのは、SA8877とSA125の南北距離が約179mになることである。これは、平城宮内裏(I期)外郭の南北距離176.7mに近い。また、ともに外側の区画施設から内側へ18mの位置にあり、柱間が3mで同じような大きさの掘形をもつ。これらのことから、藤原宮内裏の内郭を囲む北と南の堀である可能性がある。ただし、東と西を限る堀は、未検出のため、東西の長さは不明である。また内郭の南を限る堀SA8866とSA8877の関係についても明らかにできなかった。22次調査で検出した堀(SA2231・SA2232)の西への延長も含めて、内郭を限る区画施設についてはさらに検討が必要である。

(伊藤敬太郎)



図19 調査風景 背後の森が大極殿 北から